



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エトノス・イデオロギー：ソヴィエト民族学における「エトノス理論」の諸相
Author(s)	三栖，大明
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16975号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16975
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99819
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroaki_Misu_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 三 栖 大 明

学位論文題名

エトノス・イデオロギー：ソヴィエト民族学における「エトノス理論」の諸相

・本論文の観点と方法

本論文は、ソ連期の民族学者 Iu. V. ブロムレイと L. N. グミリョフのエトノス定義を巡る論争および両者のエトノス・ヒエラルキー論に焦点をあてることで、ソヴィエト民族学を特徴づけるエトノス理論の具体像を明らかにするものである。本論文の観点の特色としては、従来の研究においてグミリョフの理論が「生物的」であるとされ「社会的」なブロムレイの理論と対比される傾向が見られたのに対し、この2分法が形成された歴史的背景や民族学における論争のプロセスを明らかにしつつ、これまで見過ごされてきた両者の主張を個別に検討した点が挙げられる。本論文の研究方法は、ブロムレイとグミリョフが1970年代に出版したエトノス理論に関する著作、および、『歴史の諸問題』、『自然』、『哲学の諸問題』、『旗』などの学術誌における、同時代の民族学者を巻き込んだ両者の論争の分析である。さらに、同時代的なエトノス理解を知るため、1960-70年代に『ソヴィエト民族学』誌などに掲載された当時の民族学者たちの論考も分析対象とした。以上の分析を通して、ポスト・スターリン期以降のソ連における民族観の変遷を明らかにした。

・本論文の内容

第1章では、ソ連における民族学の歴史とエトノス概念の位置づけを概観した。ソ連の成立当初から民族学はその民族政策と密接な関係にあったが、スターリン期には、帝政期以来の民族学の専門家が抑圧されるとともに、民族学はマルクス主義歴史学の下位分野に編入された。しかし、フルシチョフ期になると、民族学は独自の分野として復興を遂げるようになった。この時期、社会主義の発展に伴って国内諸民族が均質化してソヴィエト人へ融合すると唱えられた。1966年に民族学研究所の所長となったブロムレイは、それにもかかわらず独自のエトノスとしての意識を維持する人々がいると主張し、この状況を「民族のパラドクス」と呼んだ。この「民族のパラドクス」というソ連社会の理解を背景として、ブロムレイやグミリョフといった学者たちが民族学の観点からエトノスに着目することになった。

第2章では、ブロムレイやグミリョフによるエトノス理論が登場する歴史的文脈を知るために、1966-68年に『歴史の諸問題』誌で行われたナーツィヤ概念を巡る論争を分析した。この論争では、ソヴィエト人への国内諸民族の同化主義的な融合論台頭を背景として、スターリンが提起したナーツィヤ定義の妥当性が再検討された。その過程でナーツィヤは資本主義や社会主義の段階を越えて持続するエトノス共同体だとされた。このため、ソヴィエト人と共存するエトノスとは一体何かについて、厳密に定義する必要性が生じた。ブロムレイとグミリョフは、この論争で提起されたエトノス観の延長でそれぞれ独自にエトノス理論の構築を試みるようになった。

第3章では、1970-71年の『自然』誌におけるブロムレイとグミリョフのエトノス定義を巡る論争を取り上げる。1970年に『自然』誌に掲載された論文において、グミリョフは言語や文化といった特徴からエトノスを捉える立場を否定し、エトノスごとに異なる行動規範を景観への適応や熱情性に由来するものだと主張した。これにブロムレイが批判論文を寄せることで、エトノスという用語を巡る論争が生じるようになった。しかし、結果として論争に参加した論者たちが合意に達することはなく、エトノスを一義的に定義できないという現実が露呈した。そうした状況下で、諸説あるエトノス論のうちグミリョフの学説が周縁化され、ブロムレイの学説が公式的なものとなった。

第4章では、1988-89年に『旗』誌と『哲学の諸問題』誌で再燃したブロムレイとグミリョフの論争を扱った。この論争では、エトノス定義とエトノスの遺伝的性質をめぐる、『自然』誌での論

争と同様の論争が繰り返された。一方、1970年代初頭とは異なり、グミリョフが提起した「民族的キメラ」という概念が新たな争点となった。『旗』『哲学の諸問題』誌での論争は、ペレストロイカ期に公式学説が相対化される中で、『自然』誌での論争以来疎外されてきたグミリョフの学説が復権した出来事であった。当時、グミリョフの周囲にはロシア民族主義と関連する人々が集っており、キメラ論を巡る論争はこのロシア民族主義者の動向を背景とするものであった。論争の直後にブロムレイは死去し、2人の理論家のエトノス定義を巡る論争は解決を見ないまま終焉を迎えた。

第5章では、ブロムレイのエトノス理論のうち、従来注目されてこなかった遺伝学的側面を取り上げ、彼がエトノスを族内婚単位と見る観点の延長上でエトノス・ヒエラルキー論を構築したことを示した。ブロムレイは遺伝学上の最小単位たるデームを基礎に、多種多様な集団をエトノスと見做し、サブエトノスからエトノス、メタエトノス共同体へと至るエトノス・ヒエラルキーが見られると主張した。ブロムレイは各集団の固有性を遺伝学によって本質化するとともに、エトノス同士が部分的に連続すると述べることで、ソヴィエト人への国民統合論をより多元的なものへと変化させたのである。

第6章では、グミリョフが行動規範以外の客観的特徴を除外した特殊なエトノス定義によって多種多様な集団をエトノスと見做し、それらエトノスとされた諸集団が集合してエトノス・ヒエラルキーを形成すると主張したことを示した。スターリンによるナーツィヤ定義以来、ソ連では民族を言語や文化を始めとする客観的特徴によって定義されると考える立場が一般的であった。しかし、グミリョフはそれらの特徴をエトノス定義から除外し、代わりに行動規範の差異を通して観察される「我々」と「彼ら」の区別に注目した。その結果、さまざまなレベルの社会集団がエトノスと見做され、それらの諸エトノスが最下層のコンソルツィヤからサブエトノス、エトノスを経てスーパーエトノスへと至るヒエラルキーを形成するのだとされた。

終章では、以上の議論を踏まえ、ブロムレイとグミリョフがエトノスの定義を巡って論争を繰り返しつつも、両者ともソ連社会の多様な住民集団をエトノスと見做し、それらの諸集団が巨大エトノス（ソヴィエト人が想定される）の内部で相互作用するものだとして主張したことを示した。遡れば1960年代末の『歴史の諸問題』論争では、ナーツィヤはエトノス共同体であるがゆえにソヴィエト人と共存可能だとされた。しかし、当のエトノスとは何かという定義は曖昧であり続けた。ブロムレイとグミリョフの議論においても多種多様な集団がエトノスと見做され、各集団が対置されるレベルごとに多層的な民族的帰属があり得ると考えられた。その上で、ブロムレイとグミリョフは、諸エトノスがエトノス・ヒエラルキーの内部において相互作用すると思ったのである。以上のようなブロムレイとグミリョフによるエトノス理論はともに、多様な集団単位の維持とそれらのソ連への統合を両立させるというポスト・スターリン期の民族政策上の課題に応えるものであったと言える。そのため、彼らは2度の論争を経るほどに対立しながらも、その理論的帰結に関しては類似した形態へと収斂せざるを得なかったのである。